
リリカルなのは 最低なトリッパーの日々

交わらない世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 最低なトリッパーの日々

【Nコード】

N3378Z

【作者名】

交わらない世界

【あらすじ】

最低な主人公がとりあえずなにも考えず原作崩壊させたり楽しむ話

シンプル(笑)な能力

神様トリップしました。

いやー素晴らしいものですね、もらった特典は創造です。

すごいですよこの能力は生命以外なら何でも作れるらしいです。

あ！ちなみにトリップした先はリリカルなのはの世界です。

「周り荒野とか、どんだけ敵しんだよ神様wwwwww

原作の面影もねーよwwwwww

とりあえず、家を建てとくかwwwwww」

リリカルなのはは次元世界つてのがあからその中のどれかだ
ろうなこの世界は。

まあ、テンションあげていきましょう。

それにしても、家か、どんな家建てよう？

まあ、無難にログハウスでも作っておこう。

「チヨチヨイのちよいつと」

中は結構普通に作った。

地下も作っておいたぜ！ 地下は空間を歪めてだだっ広い空間を
作った。

地下牢とか欲しかったけど自重したんだぜ！

「さて、家も作ったし次はどうするかな」

うーん、そうだな能力を作るか！」

俺がもらった創造の能力は生命以外、何でもつまり能力だろうと
何だろうと作れてしまうのだ！！

さて、そうと決まればどんな能力を作るか……シンプルに行くべきか。

そつだなそれじゃあ、絶対防御ぐらいでいいか。

内容はあらゆる危険な事象を防ぐでいいな、これこそシンプル！
かつこ良く（笑）能力を決めた所で能力を試してみよう。

まずは近くにある土を生贄（素材）にして！ 大岩を召喚（作成）！！
そしてそれを俺の真上から落とす。

大岩は俺の20cm上で止まり見えない壁に衝突したようだ、見えない壁に衝突した大岩にヒビが入り割れる。

俺の周りには大岩の破片が転がっている。

どうやら俺を中心に半径175cmの球状の障壁ができています。
しい。

「ふむふむ、なかなか頑丈だな」

それじゃあ、次の実験言ってみよう。

次は近くの土を生贄にいくつかの石の槍を目の前に召喚、障壁の中から攻撃だ！

石の槍は服にあたり動きが止まる、服に沿うように障壁が張られているようだ。

肌が露出している部分、手や頭などにも石の槍による攻撃が当たるがやはり止まっている。

肌に沿うようにも障壁が張られているようだ、何段重ね何だろう？

その後も結果をはってその中の酸素をすべてなくすという方法を使ったりいろいろな方法で実験をした。

「ハッハッハッハッ、ちょっとやり過ぎちゃったんだぜ ミ」

周りはやばいことになっている、溶けたり凍ったり変なガス出

してたり、最終的には太陽の中に入っても大丈夫ってわかったぞw
www

「チヨチヨイのちよいつと直して、絶対防御以外の能力は封印つと」

封印したのは土を大岩にしたりした錬金術とか太陽に移動した時に使った瞬間移動とかだ。

「実験も終わったし、もう夜だし、今日はこれで終わりにして寝るか！」

俺はそう言うと、家の中に入りベットに潜り込み寝た。

拾ったのはボロ雑巾のようなもの

トリップ2日目、この星のことを調べたが俺以外人間が存在して
なかったWWW

てことで、この世界を中心にしているいろんな世界に行ってみよう
と思う、今はまだ原作前だし。

原作まで12年といったところか、まだ主人公も生まれてないな
WWW

「どんな世界に行こうかな、やっぱり命の軽い世界がいいかな、奴
隷とか普通において人権がない世界……よし！ その設定で探そう」

そして、条件にあつた世界を探す魔法を創る。

「結構あるな、まあ世界が無限に広がっているようなものだし当た
り前か、管理局が介入している世界はちよつとずつ人権とかの意識
がされているな

それでも奴隷なんかは居るみたいだが」

急速に世界を変えるのは難しい、そういう事を管理局も理解して
いるのだろう奴隷自体も禁止されているがある程度は見逃されてい
るらしい。

「まあ、管理局が介入してる世界には行かないけどな、それじゃあ
移動っつと」

「移動完了、それじゃあ適当に歩きますかね」

うむ、ひどいな浮浪児がたくさんだぜ！　そこかしこに汚物があるし汚い。

どうやらこの国は戦争中で最近負けが多いそうだ、戦争孤児などもいるからこの状態っと。

「よりどりみどりだな、ここは定番通り恩に着せて忠誠を誓わせるか」

俺は適当な裏路地に入っていく、すぐに不快な視線を感じたが魔力光を纏う、この世界では魔法は貴族しか使えないらしい。

つまり魔力光をまとっていると変なのが寄ってこないのだ！　その証拠にこちらを狙っていた奴らは速攻で逃げていったしな。

「見つけた、もうこれでいっかwww」

それなりに顔が良くて、使えそうなのを探してたんだがなかなか見つからないしボロ雑巾のように道端で死にかけてるけど、これにしよう。

「おい、生きてるよな？　うん、大丈夫だな、今日からお前は俺のモノだ！」

誘拐犯上等で相手の許可を取らずに抱え、家のある世界に転移する。

ご主人様のために頑張れ

少女を誘拐してきて1ヶ月wwww

めっちゃ懐いてます、いやー、連れてきて目が覚めるまで世話をしてたんだが、目を覚ました少女は初っ端から俺を父親扱いしました。

記憶がないのかそれとも最初からこんなのははしらないが父親じゃなくてご主人様だと教え込みましたがwwww

甘えん坊さんなんですがね、とつても優秀です、教えたことは大抵すぐに覚えるし、従者として申し分ないな。

「ご主人様、もう新しい魔法覚えました、褒めてください！！」

そう言ってぴったりと張り付いてくる白亜^{はくあ}、ちなみに白亜は少女の名前だぞ！

最初はボロ雑巾のようだったが、どうにか綺麗にしてかすり傷とか小さな傷もきれいにしたら肌は結構白くて綺麗だったから白亜だ。安直な名前だがこんなもんだろう？ 感覚的に捨て犬や捨て猫に名前をつける感じでつけたけど。

「ああ、よく出来たな白亜、これで広域殲滅魔法も覚えたし、次は次元跳躍魔法と次元世界移動の魔法を覚えたらいろいろ回ってみるか」

「はい、ご主人様、白亜は頑張ります、だから、だから、捨てないでください……」

そう言って抱きついてくる白亜、今俺に捨てられたとしても一人でいきていけるぐらいにはなっているのどこまで怯えるとは、人

問ってのは一度得たものをなくすのはやっぱり怖いんだなwww
「きちんと覚えれば捨てないさ、本当は半月と言いたところだけ
ど、あと1ヶ月でどちらとも覚える、いいな？」

「はい！ 絶対に覚えます、ご主人様！」

実際には次元跳躍魔法と次元世界移動の魔法を1ヶ月で覚えるな
ど正気の沙汰ではない、次元跳躍魔法などどれだけ才能があっても
5年はかかる。

それに次元世界移動を行うなど普通は不可能とされている、次元
にも距離といったものがありその距離を無視して移動することなど
できたら次元航行艦はいらないからな。

まあ、そんなものを1ヶ月で覚えられるのは俺が少し、弄つ……ゲ
フン、ゲフン、調整したからだ。

でもそこまでチートなわけじゃない、結構デバイスがサポートし
ているしデバイスがなければかなり才能がある魔導師といった程度
だ。

「ああ、頑張れよ期待してる」

「はい、絶対に期待に答えて見せます！！」

「グノーシス、セットアップ」

私はご主人様から頂いたインテリジェントデバイスであるグノー
シスを起動させる。

周囲がほのかに光、私はバリアジャケットをまとい、手の中には
本が現れる、起動状態のグノーシスです。

『セツトアップ完了しました、マスター』

ちなみにグノーシスは待機状態はスケルトンキーという種類の鍵です。

鍵穴に当てればどんな鍵だつて開けられるというおまけ付きらしいです、使ったことはありませんが。

グノーシスの性能は管理局と呼ばれるところにある無限書庫と呼ばれるデータベースをすべて記録してありなおかつ全てを整理、理解して、さらに編集するほどらしいです。

「うん、グノーシス、次元跳躍魔法と次元世界移動の魔法についていつもどおり頭に直接送って」

『それは危険です、マスター、情報量が多くそんな事すればマスターがただではすみません
ですのでどちらか一つにしてください』

心配そうにそういうグノーシス、でも私はご主人様の期待に答えたいのです。

「グノーシス、お願いします時間が無いのです」

『マスター、もうおやめくださいあの男に従う必要などないので
あの男は調整などといいマスターの体を弄り回し、ろくな事
しません、私の知識があればあの男から離れて体をもとに戻す
ことも可能ですし、ですか』

「グノーシス、貴方でもご主人様を侮辱するのは許しません、貴方は私のために作られた存在でしょうが自分を作ったご主人様を侮辱

するとはどういうことですか」

『マスターのために作られたからこそです、あの男はマスターなど
どうでもいいのです、このままでは壊れるまで使い潰されますよ！』

そんな事、そんな事！！

「知っています、どうせ私などそこらに捨てられるゴミと変わりが
せん、少なくともあそこではそうでした」

あの地獄のような場所、力なきものから死んでいくあの場所では
私などゴミでしかありませんでした。

「私はご主人様の所有物でいいです、そばに居られればそれでいい
んです……使い潰されるなら本望です

もう、いいでしょう早く情報を送ってください」

『マスター……分かりました、絶対に耐えてください……クリエイ
ターのために』

「当然です、私はご主人様のために絶対に耐えます」

そして送られてくる、膨大な情報量、頭が痛い、だがそんな事を
無視して送られてきた情報を分析する。

メリット・デメリット、出来る事と出来ないこと、消費魔力、術
式に詠唱短縮方法、さらに無詠唱での発動。

グノーシスにより整理、編集されているというのにそれでもかな
りの量の情報です。

ですが耐えます、耐え切ってみます、ご主人様の調整された私に
不可能はないのですから。

「どうにか……耐え、きれました」

『無茶をしましたねマスター、あれから3日たちました』

3日ですか、予想の範囲内ですね。

「では、テストを始めますよ、実際に使ってみなければ分からないことのほうが多いのですから」

『分かりました、それではテストケース1、次元跳躍魔法使用時の術者への攻撃対処から行きましょう』

そして、1ヶ月後には見事に次元跳躍魔法、次元世界移動の魔法を習得しました。

神様ごっこがしたい！ ついでに闇の書も回収作戦、別にクロノの父親を助け

原作11年前、確かクロノの父親が死ぬ年だ、ちよつと前に闇の書の主が捕まったらしい今は輸送中とか、どうしようかな、助けようかな？ 助けまいかな？

神様ごっこでもやってみようwww

「というわけで、助けよう」

「突然どうされたのですか？ ご主人様？」

突然俺が声を出したので白亜が不思議そうにそう聞いてくる。

白亜は俺が拾ってからつまり9歳の時点の体から成長していない、これは主人公組に混ぜようかなと思っっているからだ。

まあ、栄養失調などで死にかけていたわけだから平均よりかなり小さいのだが9歳だ、いや、今は関係ないな。

「うん？ いや、闇の書つてのを知っているか？」

「知っていますが、それがどうかしたのですか？」

「欲しくなったから貰いに行く」

いや、実際には神様ごっこがしたいだけなのだが、ついでに貰うぐらいいいだろう。

「そういう事ですか、分かりました、輸送しているのは確かエステイアという艦船でしたね、それでは、ん？」

「どうかしたか？ 白亜」

「はい、どうやら闇の書が暴走しているようです」

うむ、時間がないようだ。

「白亜、お前は俺の指示通りに動け」

「はい、ご主人様」

「ここまでか……」

すまない、リンディ、クロノ、俺は帰れそうにない……

もうじきこの船はアルカンシエルにより消滅するだろう。

「チーツス、神です、助かりたくありませんか？」

なんだ？ 子供？ なぜ子供がこんな所に？

もうじき艦船と共に消滅するだろう俺の前に現れたのは仮面をした少年だった。

「逃げ、るんだ、アルカンシエルが、来るぞ！」

「逃げる？ なんで？」

ほんとうに意味が分からないという顔をしてそういう仮面の少年、ノイズ混じりのモニターには今まさにこちらにアルカンシエルが放たれた映像があった。

「む、豆鉄砲か？ まあいいか、それよりさっきの話の続きだ助かりたいか？」

信じられないことが起こった、アルカンシエルがこの艦船に直撃する前に弾かれたのだ。

今の言葉からするとアルカンシエルを弾いたのはこの少年だろう、それにしても助かりたとは

「どういう、意味かな？」

「うーん、まあ、いわゆる俺は全能の神様なわけだよ、で、暇だったからなにかないか探してたら闇の書ってのがあったから欲しくなって貰いに来たんだけど死にかけの人間がいたから助けてみようかなとか思ってたわけ」

全能の神様か、少し信じられないけどアルカンシエルを豆鉄砲扱にする人物だ、それにしても闇の書が欲しくなったから貰いに来たとは。

「闇の書は諦めてくれないか、アレは危険なものなんだ」

「い・や・だ、欲しいから貰っていく、それから面倒だからあんたは助かりたいという事で」

パチンパチン、少年は指を二回鳴らす、すると俺の傷が瞬く間に治り、次の瞬間には地の底から鳴り響くような音がしたと思ったら静かになった。

「傷は治したし、闇の書は封印できた、次は船の修理か」

少年がパチンと指を鳴らすと瞬く間に船が直った。

「さてと、闇の書も回収できたしそれじゃあね」

「な！ 待つんだ！！」

俺は叫んだがその間に少年は消えていた。

これが次元世界で指パッチンの神様と呼ばれることになる少年との初めての出会いであった。

闇の書、そして原作崩壊

「ただいま、白亜、闇の書は？」

「はい、こちらです」

神様ごっこがしたい！ ついでに闇の書も回収作戦、別にクロノの父親を助けたのはついでなんだからね！ 勘違いしないでよねっ
！

では白亜には闇の書の回収をしてもらった。

「うんうん、うまく封印できてるな！ それじゃあ、パパっといじってみよ……うっ？」

「どうかしましたか、ご主人様？」

「うん、アレなに？」

なんか知らないけど女の人が転がっている。

「ああ、アレですか？ 闇の書にくっついていたのでそのまま持って来ましたが、そこら辺に捨ててきましようか？」

あ、多分今代の闇の書の主だろう、まあ、気絶してる間にいじろう。

「捨てなくていいよ、たぶんまだ使い道があるから」

「分かりました」

それじゃあ、まずは結界を張って、っと、結界が張れたら闇の書から闇を取り出して結界に弾き飛ばす。

結界の中でドロドロした黒いのが蠢いているが気にしない、闇の書、いや、闇はなくなつたし夜天の書でいいか、夜天の書の管理者権限を取得する。

そして、少し設定をいじる。

「よし、神野^{かみの} 創^{そう}の名のもとに起動しろ夜天の書」

そう言つて俺が夜天の書を起動させると夜天の書はひとりでに浮き上がりページがバラバラとめくれる。

それが終わると四方に光の柱が立つ。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

光の柱の中からは4人の女性が現れた。

まずはピンクの髪をした女性、剣の騎士シグナムだ。

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

緑の髪の女性が言う、湖の騎士シヤマル。

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

次は青い髪の凜々しい女性がいう、盾の守護獣ザフィーラである。

最後にいじつた設定はザフィーラの性別だwwww

無茶苦茶美人になつてやがるwwww

「我らが主、夜天の王、神野創の名の下に」

最後は赤い髪の少女、鉄槌の騎士ヴィータだ。

「うん、起動にも問題なし、それじゃあ管理人格の方も呼び出しておいっ」

そうやって俺は指を鳴らす、すると夜天の書のページが勝手に埋まっていく、全部埋まった所で本が光る

「さてと、夜天の主の名において汝に新たな名を贈る、偉大なる術、大いなる秘法、王者の法、アルスマグナ」

夜天の書がひときわ強く光る、そして正面に光の柱が立つ

「夜天の書の管理人格、アルスマグナ、主ソウの呼びかけの下に」

光の柱から出てきたのは長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性、本来ならリインフォースと呼ばれる女性だ。

「これで全員だな、みんなよろしく」

「シグナムです、主ソウ、よろしくお願いします」

「はい、ソウ様、私はシャマルです、よろしくお願いします」

「ザフィーラだ、主よ、よろしく頼む」

「ヴィータです、よろしくお願いします、主ソウ」

「主ソウより頂いたこの名前大切にしたいと思います、よろしくお

願います」

地面に片膝をついたまま名乗るヴォルケンリッターとアルスマグナ。

それにしてもみんな堅いな、まあ、アニメでもハヤテと一緒にすごしていくうちにあんなになつたていつてたしこんなもんか。

これでA・Sでの闇の書事件がなくなつたなStrikerSでの機動六課設立もなくなつたかも、どうしよう？

シンプル（笑）な能力などなかったのだ、指パッチンの神様と思わぬ伏兵

なんやかんなで2年後、主人公が生まれる年になりました。
原作9年前です。

「ソウ様、今日はなにをしてきたんですか？」

そう聞いてくるのは元闇の書の主であった、ファクターだ、ちなみにクーって呼んでる、クーは目覚めた当初説明したら暴れてこの世界から出せとかいったから。

元の世界に帰ったとしたら、自分の命惜しさに人を殺してしかも、今までの闇の書の主がしてきたことでかなり恨まれているのにこの世界から出ていきたいの？ と聞いたらむしろここに居させてくださいと懇願されたのでそばにしている。

それから2年で結構懐いてくれた、初めてももらったし、あ！もちろん白亜のももらったよ！！

「うん、指パッチン教とかいうふざけた宗教の神殿を潰してきただけだよ」

俺はそう言って、椅子に座っているザフィーラの膝の上に座る、ザフィーラってさ老連っていうか落ち着いてるからなんだか落ち着くんだよな、もたれかかったら胸が柔らかいし。

『クリエイター、ドンマイですね、早く死んでください』

相変わらず口が悪いなグノーシス。

「グ、グノーシス、ご、ご主人様申し訳ございません」

「……別にいいそいつの口が悪いのはいつものことだ、それよりも指パツチン教の奴らだ、アイツら俺を指パツチンの神様とか言っただけで適期的に作りやがって馬鹿にしてやがる！」

「そいつは仕方ねーんじゃねえのか？ ソウはいつも指パツチンでなんでもするからそう見えるだろ？」

「そういう問題じゃねえよ、ヴィータ、指パツチンの神様なんて、なんかよくわかんないけどすごく指パツチンが出来る人みたいじゃないか！！」

「それでしたら、降臨するのをやめればいいのではないですか？ 主ソウ」

「降臨？ どういう意味だ、アルス？」

「もしかして、気づいてなかったのですか？ 2ヶ月に1回できる指パツチン教の神殿は主の降臨祭の会場ですよ？」

「なんだそれ？ え、もしかして、あれか、怒らせて神様降臨てやつか？」

「ソウ様は慕われていますからね、それよりも今日の料理はどうしますか？」

「そういうのは、シャマル、俺専用の料理係だ、ほら俺はメシマズでも美味しく食べられる能力とか作れるから、それで忠誠度が上がったたりしたけど。」

「くっそ〜、もう今度からつぶしに行つてやるものか！！ アイツ
らマジフザケやがって！ それからシヤマル、料理は唐揚げで頼む」

はぁい〜、と返事してキッチンへと向かうシヤマル。

「シヤマルの料理ですか、今度はなにが……、いえ、今は関係あり
ませんね、主ソウが望むのなら私が関係者を切り捨ててまいりまし
よう」

「いや、いいよ、シグナム、それにしても祭りか……、2ヶ月に一
回は多いな、1年に1回にしてそれから適当に無人世界を使って神
殿でも立ててそこですることによつ」

「そうだな、主の負担を少なくするにはそれが良い」

そう言つて、俺の頭を撫でるザフィーラ、やっぱりザフィーラつて
いいやつだよな！！

私は主の頭を撫でながら考える。

今のところ私は主に多大に信頼されているだろう、ある時、元主
であるファクターと白亜から主の濃い匂いを感じたときは したく
なつたが、我慢した。

ファクターはともかく私では白亜に勝つことは不可能であろう、
それにいくら憎いからといってファクターを せすれば主は悲しむ
だろう。

幸いにして、主はまだヴォルケンリッターには手を出していない、
だからヴォルケンリッターでの主の一番を私が手に入れるのだ！！

光源氏計画（前書き）

前話の投稿0時と12時を間違えてた。

光源氏計画

原作4年前、公園で泣いている5歳のなのは発見しました。

ちなみに俺は15歳くらいで高町恭也と同じ高校に通ってる、あ、そついえば将来、恭也と恋人になる月村忍をとったけどいいよな？
いや、中学が同じだったんだが、卒業の日にあんなに盛り上がる
とは。

まあ、今は関係ないな、今はなのはと仲良くなるのが先決、やっぱり魔法の師匠的ポジションから攻めてみよう。

「こんな所で泣いてどうしたのかな？」

「ふええ！？ な、泣いてなんかないの！」

「うん？ そうか、それは悪かったな、もう結構遅い時間だぞ、そろそろ家に帰ったほうがいいじゃないか？ 家族が心配するぞ？」

まあ、実際には翠屋がまだ開いているので家にだれも居ないことを知っているんだけどな。

「そんな事ない、誰も心配なんてしない……」の

ふむふむ、落ち込んでしまった、まあ、ちょっとそこにつけ込ませてもらおうかな、最低だけど気にしない、それが俺だからWWW

「心配しないとは、なにか訳ありのようだね、お嬢さん、良かったら相談に乗ろう」

俺がそう言うと、なのは、は最初の方はためらっていたがぼつり

ぼつりと事情を話し始めた。

まあ、まとめると父が事故で入院していて、母は喫茶店で忙しく、兄姉は看病と家業の手伝いで、彼女は家で一人ぼつちのことが多いということだった。

「そっか、それは寂しいね、じゃあ俺と友達にならないか？　なのは」

「と、友達？　いいの？」

ためらいがちに聞いてくる、うんうん、可愛いね。

「いいよ、俺がなろうって言ってるんだ、なのはが決めればいい」

「じゃあ、な、なのはと友だちになってください！」

「おう、それじゃあよろしくな、なのは」

「こちらこそ、よろしくなの、創お兄ちゃん！」

元気だね、まあ、これで楔は打ち込めたからここから楽しい楽しい光源氏計画発動だwww

どんなふうに着つかない、すっごく楽しみだwww

「まあ、せっかく友だちになったんだし、なのはに俺の秘密を教えよう」

「秘密？」

「そっか、実は俺は魔法使いなんだ」

「ふええ！？　そ、それ、本当なの！？」

魔法のことを教えておく、それにいま教えておけば御神流が手に入るかもしれないし。

それというのも、なのはの運動音痴を直せるかもしれないからだ、どうやら運動音痴の原因は不安定な魔力で時々される無意識での身体強化のせいのようなからだ。

まあ、そのせいで体の動かし方が安定しないんだろう。

「じゃあ、証拠を見せてやろう」

『割れないシャボン玉』

使った魔法はシールドの最低バージョンだ、一応オリジナルになるのかな？

「わわっ！　これが魔法なの！？」

「まあ、すごく簡単な魔法だけだな、もっとすごいことできるけどここじゃあ目立ちすぎるからな」

「な、なのはも魔法は使えるの？」

うまく魔法に興味を持ったみたいだな。

「使えると思うぞ、使いたいのか？」

「使いたいの！ー！」

「それじゃあ、リンカーコアの活性化をしようか」

リンカーコアの活性化自体は、デバイスがあれば勝手にしてくれるのだが今回はないので俺がやる。

「リンカーコア？」

「あー、リンカーコアってのは魔力を扱うのに必要なものだと思う
てくれ、それじゃあ行くぞ」

俺はそう言っつて、なのはのみぞおち辺りに手を当てる、そして魔力を少しだけ流しなのはのリンカーコアを刺激してやる。

「ふえ、なんだか体がぼかぼかしてきたの、それに体が軽いの」

「魔力が多いね、なのは、安全のために制御用の魔法をかけておくから、それで感覚を掴むといい」

「変な感じなの」

「体に魔力を馴染ませるために少しだけ魔法を使ってみようか」

その後は簡単な魔法を教えた、天才つてやっぱ居るんだな少し教えただけですぐに使えるようになったし、今日はもう遅いのでそれで終わりになった。

明日は日曜日なので早くから遊ぶ約束をしてわかれた。

10,000PV記念、とある日の

をかけた訓練光景（前書き）

ホントは5,000PV記念だったんだけどね、いつの間にか倍になつてたよ！！

ホントにびっくり！！

「アクセルシューター!!! 最大速度なの!!!」

『アクセルシューター』

なのはが誘導操作魔力弾であるアクセルシューターを放つ、その数は多く対象者を360度全て囲むほどだ、200個以上はあるだろう。

「なかなか多いですし速いですね、ですが邪魔なので撃ち落させてもらいます、行きますよグノーシス、迎撃システム、イージス発動!」

対する私は迎撃システム、イージスによって全てのアクセルシューターを撃ち落とす。

あたりは魔法同士がぶつかり合った魔力反応で煙に包まれている。

ヒュッ、ビュンッ

煙に紛れて刀が振るわれる、今のは確実に殺しに来ましたね、まあ、実戦であれば声を出さずに殺しに行くのは当然ですか。

「あ、惜しかったのに、もう少しでその首が獲れたんだけど、うふふふ」

「怖いことを言いますね、すずか、とりあえず吹き飛びなさい」

そう言って、私はすずかに蹴りを入れます、刀で防がれましたか、

地上にクレーターができていますがダメージはなさそうですね。

『マスター、広域攻撃が来ます、おそらくデアボリック・エミッシ
ョンです』

「む、はやてですか、厄介ですね、グノーシス、はやての後ろに転
移してください」

『テレポーターション』

一瞬のうちに景色が変わり、私ははやての後ろに転移しました。

「やっぱり来た！！ これで終わってください、ハーケンスラッシ
ュ！！」

フェイトですか、まさか待ち構えているとは、ですが声を出すの
はいただけませんね。

「これは、油断しましたね、ですがその程度では」

「あははは、私を忘れてもらっちゃー困るよー！ ジェットーお
おおおおお！ ザンバーあああああああ！！」

アリシア！！ というよりどれだけ魔力を込めているんですか！
！ これは少しヤバイですね。

ドッゴーン！！ と落ちて大きなクレーターを作る、白亜。

「あははは、やっぱり私って最強ね、それにしても死んだかしら？

いや、そう簡単に死ぬわけないか」

私は白亜が作ったクレーターを見ながらそういう。

「お、お姉ちゃんやり過ぎだよ！」

「いや、アレぐらいしないとダメージ通らないって、まあ、死んでくれたら儲けものかな？」

心配性すぎる妹にそういう、まあ、私としてはかなりのダメージを与えたと思うけど。

「お姉ちゃんなに言ってる、え？ つ！！！」

「ん？ どうしたの、フェイ」

「今のは危なかったですよ？ 右腕がイカれました」

そう言ってる、無事な左手で私の頭をつかむ白亜、あー、これはやばいですね、ええ。

「いや、別に殺そうなんてしてないよ、ほんとだよ！！ アリシ
アウソツカナイ！」

「大丈夫ですよ、殺しません、少ししびれているせいで力加減を間違つかもかもしれませんが殺しませんから、死なないでくださいね？」

あ、これ死んじやうかも、私また死んじやうかもしんない！！
ドッガンッ！！ と音がして私は地面に、いや、岩に叩きつけられた、バリアジャケットを着ているといっても死ぬほど痛かった。

「きゃあああああああ！！！！」

「え？ 嘘、だめだよ、なんでそんな速度で近づいてくるの？ フェイト、いくらお姉ちゃんが好きだからってそんな速度で近づいてきたらお姉ちゃん死んじゃ」

そして、私はフェイトと熱い抱擁を交わして気を失った。

「ふう、これで2人脱落ですね、後4人ですか、これは本来バトルロワイヤルのはずなのですが、まあ、いいでしょう」

私は他の6人に比べて強いですし、問題無いですね。

『シールド』

グノーシスが魔法を発動したと思ったら、ガッキンツと大きな剣とシールドがぶつかり合った。

「くすくす、人間は不便だね、怪我をしてもすぐに治らないし」

そういうのは、さっきの刀とは違い3mはあろうかという大剣を持っているはずかだ。

「驚きましたよ、ほとんど気配を感じなかったのですが、それにしてもさっきといい今といい手加減がありませんね」

「ええ、だって、手加減して勝てると思いませんから、だから殺す気なんですよ？ どうせ、届いたとしても重症を負わせる程度でし

「よう？」

「ふむ、重症を負わせること前提ですか、やはり怖いですね、一応この右腕だって重症なのですが？」

「私が死んだらご主人様が困ると思うのですが？」

「ご主人様が困ることなんてあるんですか？ 必要だったら死んでも生き返らしてくれますよ、うふふ」

「ガツキンツ、ガツキンツとシールドを叩き続けるすずか、シールドを保つだけで精一杯ですね。」

「すずかちゃん、ごめんなの、すずかちゃんの犠牲は忘れないの」

『スターライトブレイカーXXX』

「下からなのはが現れ、ありえなほどの魔力を収束していく、いくつものスフィアが収束した魔力の周りに出来上がる、XXXですか最大威力ですね、まあ、好都合です。」

「収束した魔力を中心にスフィアの魔力が絡みあい理不尽な程の魔力が迫ってくる。」

『シャツフル』

「ふえ？」

「テレポートが出来るのですから、相手との位置を変えることくらい朝飯前ですよ？」

「にああああああ！……！」

「きゃあああああああ！……！」

私となのはの位置が入れ替わり、なのはとすずかが落ちて行く、呆気無いですね。

『マスター、フリースヴェルグ……：来ます！ 回避不可、シールド展開……：マスター、対シヨック……！』

「くっ！！ やって」

「はやてちゃんの所には行かせないですよお、ダイ・レーゲン・デス・スターン星の雨……！！」

リインフォース……！！

『マスター、シールド間に合いません……！！』

ドッ！ ドッ！ ダンツ！ ガガンツ……！！ ドツガンツ……！！

「全弾命中ですう、さっすがリインです、えっへん！」

うんうん、流石ね、油断してくれて嬉しいわ、リインフォース。

「エクスプロージョン」

「え？」

ドッガン！！ と派手な爆発が起こる。

「さて、あとははやてだけね、贄殿、行くわよ」

贄殿を杖から剣に変える、そして、私ははやてのもとへと向かった。

「あゝ、これはあかん、負けや、私は負けを認めるわゝ」

「残念ね、訓練に降参なんてないわよ？ この前はそれに騙されて落としてくれたものね？」

そう、この前は一対一での訓練で降参したふりをして後ろからドカンッとしてくれたのよね、ああ、思い出したらイライラしてきた！！

「それじゃあ、死になさい、タヌキ！」

「ちょ！ それはひどい！ あっ！」

はやてはなにを思ったのか私の後ろを指さす。

「はんっ！ そんな古典的な方法に」

「そして、世界は混沌へと帰る、カオティックボム」

『カオティックボム』

声が聞こえて、後ろを振り向いたときには真っ黒なものが目の前

まで来ていた、くっ！　ここまできて！！　完全に落ちてなかったのね、白亜！！

「はぁ、はぁ……、どうにか勝ちましたか、ふう」

どうにか地上まで降りる、魔力をほとんど使い切ってしまった。

「これでも、私だって日々成長しているんですから、これで、ご主人様との……デート権、は、私の、も……の」

そして、私はその場に崩れ落ちる。

10,000PV記念とある日の

をかけた訓練光景(後書き)

かけていたのは創とのデート権でした。

家族との亀裂と一生の宝もの

はっ！と目が覚める、昨日創お兄ちゃんに教えてもらった早寝早起きの魔法のおかげだ。

時間は5時、創お兄ちゃんと遊ぶのは7時の約束だから早く髪をとかしたり大変なの。

「あら？ おはよう、なのは、今日は早いのね」

料理をお皿に盛りつけながらそういうお母さん。

「あ、お母さん、おはよう、そうだ」

「ちょうど良かったわ、なのは、お母さんはこれから翠屋にいかないといけないから朝ごはんはこれね、それじゃあいい子でおとなしく待っててね？」

そう言って、お母さんはなのはの頭を撫でて行っちゃったの、髪をとかしてもらおうと思ったのに……

さて、今の時刻は7時20分、なのはと約束したのは7時、あの性格だから遅れるということはないと思ってたんだけど、どうかしたのかな？

迎えに行くべきかと考えていると公園の入口になのはが現れた。

「おはよう、なのは」

どうやら今日は髪を結んでいないようだ。

「お、おはようなの、待たせてごめんなさい！　それで、それで…
…」

「大丈夫だよなのは、ゆっくりでいいよ、どうしたのかな？」

なのはをベンチに座らせ聞く。

嫌われたり、迷惑をかけないようにしてきた、なのはに遅刻は大事件なのだろう。

なのはから聞いた話は朝の5時には魔法で起きたのだが髪をとかしたり結ぶのに挑戦していたらこんな時間になっていたと泣きながら教えてくれた。

「そつか、そつか、泣かなくていいよなのは、俺はなのはの事をそんな事で嫌いになんかならないから、おいでなのは」

「ふえ！？」

俺はなのはを膝の上に抱っこする、そして、手の中に櫛を創りなのはの髪を優しくとかす。

創お兄ちゃんがなのはの髪を優しくとかしてくれます。

なのははこの時間がずっと続けばいいと思ったの、でもそれも10分くらいで終わっちゃった。

「なのは、手を出して」

創お兄ちゃんに言われて私は手を出すの、手のひらに載せられたのは黒いビー玉みたいなものだった。

「プレゼントだよ、なのは、それがなのはのデバイス、アディクションハートだ」

「アディクション、ハート？」

なのはのデバイス、創お兄ちゃんからのプレゼント。

「そうだよ、なのはのための魔法の杖、それから、これもあげよう」

そう言って渡されたのは、黒い金色の模様が入った、櫛だ。

「その櫛には魔法がかかっていてアディクションハートを使えば自分で髪をとかしてくれる、動作はさっきの俺の動作が入っているからな」

嬉しいの、とっても嬉しいの、どちらともなのはの一生の宝ものにするの！

「それじゃあ、デバイスがあれば色々なことができるから一緒にがんばろうか？」

そう言って、頭を撫でてくれる創お兄ちゃん、こっぴどいて、なのはの魔法の修行が始まった。

ロリコン疑惑と良い感じの雰囲気

さて、日曜日にはなにに付き合っ、魔法の修行をした。今日は月曜日面倒な学校があるので通学路を歩いている。

「創、おはよう！」

そう言っ、俺の手を握るのは、月村 忍だ。

「おはよう、忍」

「うん、えへへ、ん？」

俺が挨拶を返すと、うでに抱きついて頬を緩めたかと思うと、次はなんだか暗い顔になった。

「どうした、忍？」

「え？ あ、あのね、昨日はなにしてたの？」

「魔法の修行だけど？」

なんでこんな事聞くんだろう？

「そっか、それって一人で？」

「いや、違っぞ、実は弟子が出来てな、その子と一緒にやったぞ？」

忍には魔法のことを話してある、まあ、そのほうが色々便利だ

からだ、マッドだから面白いもの開発したりするし。

「ふん、ごめんなさい、変なこと聞いて」

そう謝ってくる忍、その後はいつもどおりだった。

今は昼休み、屋上でお弁当を食べながら創と話をする。

ああ、今度はメスガキか、ゴミクズにメス豚にメス犬、ああ、鬱陶しい創に近づく全てを してやりたい。

でも、そんな事をすれば私は捨てられるだろう、そんなの嫌だ、もう一人は嫌だから。

私は、私のできることで創を助けていく、例えばこの海鳴市の裏表についてのサポートは私の担当だ。

「そつえば、忍、お前のすずかちゃんも5歳だったよな？ なのはと一緒に修行させるか？」

「それは……、そつね、あの子、幼稚園に通ってるんだけど最近うまく手加減できずに友達を傷つけちゃって自分の力を嫌っててね、そついうわけをお願いするわ、創」

これで、すずかが創に近づく可能性は高くなる、でも、一人より二人、すずかが創に近づけば姉妹ど……げふん、げふん、まあ、創もそついうことが好きだから周りよりリードできる。

よつしゃああああああ、きたよ！ すずかちゃんだよ！ テンシヨンが上がるね！！

あんな物静かな子が戦う姿はいいと思うんだ！ 特に馬鹿でかい

大剣を使って戦って、うふふ、とか笑ってたらずげえいいと思う。

「機嫌がいいわね、創」

「うん？ そう見える？ まあ、そんな事はどうでもいいじゃん、それにしても料理うまくなったな忍」

「え？ そ、そう？ だ、だったら嬉しいな、って、そうじゃなくてすずかをお願いするって言ったたらそんなに機嫌良くなって、もしかして、創ってロリコン？」

ロリコンｗｗｗｗ

そんな事ないぞｗｗｗｗただ可愛いが正義なだけだｗｗｗｗ

「ロリコンとはひどいな忍、もしそうだとしたら俺は忍と付き合っ
てないぞ？」

「ん、確かに、でも、ああ、そういう事ね、可愛ければなんでも
いいんでしょう？」

おお！ 気づいたか！ まあ、いつも公言してるからな。

「かわいいは正義だぞ」

「うん、それは分かった、けどちゃんと私も見てね？ じゃない
と……ね？」

目のハイライトが消えていますｗｗｗｗ怖いｗｗｗｗ

「言ったはずだぞ、忍、お前が自分を見て欲しいって言うなら俺は

お前自身を見てやるってな」

「あつ、そうだよな、創は約束してくれたもんね、たしかあの時は自分の殻に閉じこもっている怯えた少女が出てくるまで見守ってやるだったっけ？」

ハイライトが元に戻った、これで刺される可能性はなくなったな、それにしても昔の自分かなり恥ずかしいこと言ってるなwwww

「今は、殻から出てきて初めて見た悪い男を追いかけるいい女だな」

うまい事言ったかもしれない俺wwww

「くすくす、そうだね、でもね、悪い男でも私にとつてはとっても大切な人なんだよ？ だって私が殻を破るまでずっと私のことを見守ってくれた人だから」

ぐはっ！！ 駄目だ、なんだこの良い感じの雰囲気は！？

「もうこの話は終わりな、もうすぐ昼休みも終わるし、教室に戻るぞ！」

「うん！」

すずかちゃんゲットｗｗｗｗ

放課後、やっと学校が終わった。

(なのは、聞こえるか?)

俺はなのはに念話を送る。

(ふえ!? そ、創お兄ちゃん!?)

(そうだ、それで用件なんだが今日の練習は昨日言ったとおりやるが、少し行くのが遅くなる、分かったか?)

これからすずかちゃんを迎えに行くのだ。

(わかったの、創お兄ちゃんが来るまで自主練習してるの)

(おう、分かった、無理するなよ)

(わかってるの)

「それじゃあ、忍、行くか」

なのはとの念話を切り、忍にそう言って、忍の家に向かう。

「うん」

そう返事して、忍は俺の後ろについてきた。

お姉ちゃんの恋人が家にきた。
今までも何度かうちにきたことがあった。

「こんにちは、すずかちゃん」

「は、はい、こんにちは、創さん」

少しだけ緊張する、この人は私のことをどう思っているのだろうか？ お姉ちゃんはどちらかと言えば戦闘面より知能面に才能が特化して人だ。

私はその反対で知能面より戦闘面のほうが特化している、この人はお姉ちゃんを受け入れたが私はどうだろうか？

幼稚園で友達に怪我をさせてしまった、私の力は異常で人を傷つける力、それをどう思うだろうか？

「あの」

「うん？ なんだい？」

だから、少しだけ試すことにした。

「手、手を貸してください」

「手？ えっと、はい、どうぞ」

創さんは少し戸惑ったようだけど手をこちらに差し出してくれた。私はその手をおもいきり握り締める、私が本気になれば普通の人間の手などぐちゃぐちゃになる。

「えっ!？」

本来ならぐちゃぐちゃになっているだろう創さんの手はなんとも
ない

「うん？ ああ、そういう事か」

そう言っつて、創さんは私の頭を撫でる。

「友達を傷つけちゃったんだってね、試したくなつたのかな？ 不
安だったんだな」

更にそう言っつて、いい子、いい子と言っつて私の頭を撫でる。

「大丈夫だよ、俺は君を受け入れてあげる、それに、そんなに不安
ならその力を制御する方法を教えてあげるよ」

「出来るの？」

「出来るよ、簡単だ俺についておいですずかちゃん」

創さんは私を受け入れてくれるといった、力の制御も出来るとい
うなら私は創さんについていこう。

すずかちゃんゲットwwww

少し読心系の能力使っただけど手を出してとかなにを狙つてたのか
わかんなかったしな。

使っつて正解だったぜ、さて、それじゃあ今日はなのはとすずかち
やんと訓練して終わりだな。

原作？ 開始（前書き）

原作まで一気に飛びました。

機会があれば原作までの間にあったことを番外編として書きたいと思います。

原作？ 開始

あつという間に4年が過ぎた、ついに原作開始の日になりました

WWW

それというのも魔力を持った物体が空から降ってきたからだ、それにユーノからの念話もあったからな。

「さてさて、原作はどのように変わるんだろうな？ クッククック」

「将来か、あむ、うむ、私は創お兄ちゃんのお嫁さんかな、すずかちゃんとアリサちゃんは？」

私はタコさんウインナーを食べて聞く。

「うちは、お父さんもお母さんも会社経営だし家を継がなきゃぐらいだけど？」

「私はお姉ちゃんのように創さんのサポートをしたいなと思ってるけど」

やっぱりすずかちゃんはそうなんだね。

「そういえば、今日の夢なんだけど、念話があったよね？」

「ああ、あれね、安眠妨害もいいところだわ」

「確か、ジュエルシードって言ってたよね？」

ジュエルシード、多分ロストロギアかな？ 創お兄ちゃんならな
んか知ってるかも。

「今日は創お兄ちゃんのところに行かない？」

「そうね、創ならなんか知ってるかもしれないものね」

「そうだね、創さんのところ行くなら塾に行くよりよっぽど勉強に
なるしね」

そうやって、創お兄ちゃんの家に行くことが決まったの。

なのはたちが家にきた、あれ？ フェレットもどきは？ 原作は

……うん、今更か……

「それで、どうした？」

「えっと、昨日の夜のことなんだけど」

やっぱり、ジュエルシード関係だよな。

「ああ、あれか、うん、そうだな、ゲームをしないか？」

「ゲーム、ですか？」

「そうだ、さすが、まあ、ゲームってのは誰が一番ジュエルシード
を集められるか、だな」

もう原作なんてあって無いようなものだが、一応頑張ってみよう。

「へえ、ルールは？ ゲームっていうんだからあるんでしょ？
それに景品もね」

「そうだな、ルールはリミッターで魔力をAAまで抑える、一応成長率はありだから頑張ればリミッターが緩くなる、くらいかな、景品は……なにがいいかね？」

景品は考えてなかったな。

「じゃあ、じゃあ、私は創お兄ちゃんのお嫁さんなの……！」

「わ、私は、恋人に……」

「そうね、それじゃあ、あたしは将来のために会社経営なんかの勉強を教えてほしいわ」

「なのは、さすが、そんな事言っていると忍が参戦してめちやくちやになるぞ、景品は俺が一日、行動に付き合っつてやる権利にする」

まあ、これなら問題ないだろう。

「そうね、あたしはそれで問題ないわ」

そう言っつて、アリサはピンクと緋色の太極図になっているコインを弾く、アリサのデバイスである贄殿だ。

「うーん、私もそれでいいの、はあ、創お兄ちゃんのお嫁さん……」

なのはは、そう言っつて、首から下げている黒いビー玉のようなア

デイクションハートを弄る。

「私もそれでいいです、でも、誰かが死ぬなんて痛ましい事故が起きなければいいですね？」

そう言っつて、手の中に小刀を呼び出す、変幻自在の剣、巳六みろくだ。

「ルールの追加だ、人を直接、間接に関わらず殺したと俺が判断した場合、失格だ、それから白亜」

「はい、ご主人様、ゲームマスターをすればよろしいのですね？」

さすがは、12年一緒にいただけはあるな、俺が言いたいことを分かっている。

「それじゃあ、白亜をゲームマスターにゲームを開始する、なにか問題があれば白亜に聞くこと」

そして、ゲームが始まる。

ユーノよ！ さよならまた会う日まで（前書き）

ユーノが好きな人、注意！

この世からさよならします。

ユーノよ！ さよならまた会う日まで

創お兄ちゃん発案のゲームが始まった。

ゲームにするってことはジュエルシード自体は創お兄ちゃんにとって特に価値がないと思うの。

それじゃあ、創お兄ちゃんの目的はなんだろう？

まあ、今は目の前のことが終わるまで待つておくの。

「くっ！ ぐあああああああー！」

喋るフェレットがジュエルシードの思念体に食べられて死んだの。見殺しも間接的に殺していることになる可能性があるから、白亜ちゃんに確認したらあれは、自分から挑んでいつているのだから関係ないとのことだった。

「それじゃあ、行くよ、アディクションハート、ジュエルシード、シリアル21、封印」

『はい、マスター、ジュエルシード、シリアル????、封印します』

なんだか、すっごく呆気ないの、ん？ アレは？

「アディクションハートに似てる」

『私の名前はレイジングハートです』

『レイジングハート……マスター、どうやら私のモデルになったデバイスのようです』

ふうん、そうなんだ、どうしようこれ？

「おめでとう御座います、なのは、キーアイテムの入手によりポイント一点贈呈です」

「へ？ キーアイテム？」

「そうです、ご主人様が御決めになったモノがそれとなります、ですが、キーアイテムにもモノや手に入れるタイミング等によってマインスポイントになる可能性があるので気をつけてください」

うーん、創お兄ちゃんが決めたものか、他のロストロギアなんかもポイントになる可能性があるってことかな？

「ちなみに、ジュエルシードの思念体に食べられたユーノ・スクライア、あのフェレットもどきですがキーアイテムとしてポイント2点でした」

「ふええ！？ 助けておけばよかったの」

面白そうだからって、見物にしたのが間違えだったの、あゝあ、もったいないことしたの。

「それでは、なのは、ユーノ・スクライアの所持していたジュエルシード1つに封印したジュエルシード1つ、レイジングハートのポイント1点で合計3点ですね、残りのジュエルシードは19個、頑張りなさい」

「はい、なの」

一日で3点も手に入れたし今日はもう帰るの。

キャラがかぶるから大人の体なんだよ

ユーノがwww

ちよ、マジかよ！ A・sはもう完全に崩壊してたけどまさかここでユーノが死ぬとはwww

白亜も容赦無いな、もうちょっとゲームのルールを詰めとけばよかったぜ、ユーノは、まあ、色々終わってからだな。

「ご主人様、こちらがレイジングハートです」

俺は白亜が差し出してきた、レイジングハートをつかむ、ふむ、確かに温かい。

『適性がありません、セットアップは出来ません』

「別に变身なんてする気ないからいいぞ、まあ、少しいじらせてもらっかな」

そういつて、俺はレイジングハートを握り締める。

なにが起こったのかよく分からない、目の前の鏡に写るのは真紅の長髪に金の目、人の形をした体、大きさは大人サイズのような。

「これ、は？」

「うん、うまくいったな、単体完成型自立デバイス、それが今の前の状態だ、レイジングハート」

そういうのは、マイスター？ どうやら少しだけ設定をいじられているようだ。

「単体完成型自立デバイス？」

「そう、そのままの意味で単体で完成している、自立したデバイスだ、それじゃあ、白亜」

「はい、レイジングハート来なさい」

そして、私は白亜様についていく。

私は、レイジングハートを衣装部屋に案内し服を着せました、ちなみにレイジングハートが選んだのは紅のスーツでした。

最初は服を着ることに難色を示していましたが、服がご主人様の特殊な魔力で編まれているのでバリアジャケットのようなものだといったら納得して着ていました。

「それでは、これからあなたの姉妹となる者たちを紹介します、仲良くしなさい」

「はい、分かりました」

そして私は、ヴォルケンリッターの待つ部屋にレイジングハートを連れていきました。

「何だそいつ？」

白亜様に案内され姉妹になるという方々がいる部屋に入ると、そんな事を言われた。

「ふっ」

「ん？ 今お前、あたしを見て鼻で笑わなかったか？」

おや？ バレてしまいましたか、まあ、スペック的にも体的にも私のほうが優っているのに姉だからといって敬う気はないですが。

「そんな事ありませんよ」

「はあ、お前、スペック的に上回ってるからって調子に乗ってるだろ？ とりあえず模擬戦室行くぞ、ついて来い」

「オヤオヤ、怖いですね」

何がしたいんでしょうか？ 理解不能ですね、スペック的に私に勝てる確率などないのに、それともそんな事も分からないほどののでしょうか我が姉は。

あたしは新しく出来た妹、レイジングハートを連れて模擬戦室にきた。

いまいち妹らしくないが特にあのご立派な体だあたしよりデカイ妹ってなんだよ、後でそのへんをあそこに居る創に聞いたただせねえとな。

まあ、今は生まれたばかりでよく分かってない妹を躰けるか。

「それでは両者、準備してください」

レイジングハートはマントだけを出現させたようだ、まあ、あのスーツはバリアジャケットのようなものだから問題ないだろ。

「お姉様、セットアップなさらないのですか？」

「お前程度に必要なない」

そう、必要ない、バカ妹にスペックが全てじゃないって教えてやるためのだから。

「はあ、負けた時にセットアップしていなかったからと言いつい訳しないてくださいね」

「両者準備が整ったようなので、それでは」

戦闘開始、とその声と共にまっすぐこちらに突っ込んでくるレイジングハート、あたしはタイミングを合わせ半回転して一歩下がりを足を出す。

「なっ！」

まっすぐ突っ込んできたレイジングハートはあたしの足に引っかかって、かなりのスピードが出ていたのだろう、すごい勢いで転がっていった。

「くっ！ なれない体なんか使うのではありませんでした、魔法でいかせて頂きます！」

「スファイア！」

上空にたくさんの誘導操作魔力弾が生成される、100個くらいか？

「ファイア！」

レイジングハートの号令で100個ぐらいの誘導操作魔力弾があたしに迫ってくる。

「単調すぎるぞ、こんなんじゃない」

あたしはレイジングハートへ歩いて近づいていく

「誘導操作魔力弾の動きが機械的すぎるぞ、だから、少し予測値をずらされることで当てられない」

レイジングハートの目の前まで行きそういう。

「まだっ」

「これで終わりだ」

あたしはレイジングハートが動くより早くレイジングハートのみぞおちを殴る。

「そんなものバリアジャケットを着ている　っ！！　ぐはっ！」

レイジングハートは血を吐き出し片膝を付く、まあ、いわゆる鎧徹しってやつだな。

「いいか、レイジングハート、あたしたちはプログラム体だが、創の力で努力すれば成長できるようになる」
成長するのはバカにできないんだ今回のように相手がスペック的に優っていても努力して成長すれば勝てるんだからな」

「せ、い……長？」

「そうだ、成長だ、あたしはレイジングハート、お前のお姉ちゃんだ、だからあたしはスペックが高いからって天狗になってるお前にそんなんじゃダメだって、そんなんじゃ大切なものを守れないって事を知って欲しいんだ」

あたしは、昔、成長の能力なんかいらなと思ってた、このスペックでもほとんど敵なんて居ないからな、調子にのって天狗になってた、それで、一度勝ったことのある格下に負けたんだ」

レイジングハートは沈黙している。

「そのせいで創の計画に少し支障がでた、まあ、あいつにとって少し高い程度の授業料だとか言ってたがな」

あたしはなんで負けたのか創に問いただした、それで返ってきた答えは

「あの騎士はたぶんお前が来ることが分かっていた、それでもってお前を倒すために努力して成長して勝ったんだろ、まあ、勉強になっただるヴィータ」

だぜ、まあ、勉強になりすぎて、涙がとまんなかったぜ」

それでもって、あいつが見てる前じゃあ、もうゼッター誰にも負けねーって心のなかで誓ったんだ。

「勉強、になりました、お姉様……私も、お姉様みたいに、強く、なれるでしょうか？」

「お前が強くなりたいって言うなら、特別にお姉ちゃんである、あたしが強くしてやるよ」

「ありがとうございます、お姉様」

そう言って、レイジングハートは気絶した、はあ、仕方のない妹だな、あたしはレイジングハートを背負って模擬戦室を出た。

序盤なので巻いていきます(前書き)

かなり短いです。

序盤なので巻いていきます

「うん？ この感じは……」

ジュエルシードね。

「贄殿、ターゲティングしなさい、昨日はなのはに取られたし今日は私が貰うわよ」

『もうターゲティングしてる、これで邪魔されることはない』

さすが贄殿、さて、場所は神社ね。

『ジュエルシード？？封印』

「呆気なさ過ぎよ、にしても、どんな願いがあったらあんなに可愛い犬があんなになんのよ！」

『知らない、クリエイターは願いを歪めて叶えることに定評があるって言ってた』

「はあ、なんにしてもこれで1点目ね」

「さて、プールで一つ、学校で一つで3点目、呆気無く封印できるけど、搜索魔法の範囲が結構狭いから面倒よね」

すずかは家の近くにあった、ジュエルシード一つで1点、なのは

は、あたしと同じ3点か、本来なら1日で終わりそうなものをこんなに時間をかけなきゃなんないなんてめんどくさすぎよ!!

『仕方ない、これはゲーム、クリエイターの遊び』

分かってるわよ、はあ、贅殿はいつも冷静ね、まあ、だからこそ私との相性がいいたけだ。

「まあ、いいわ、これでなのはと並んだしちょっとずつ探していけばいいでしょうっ」

原作前の話

「ファクター」

「は、はい、ご主人様、何でしょうか？」

どこかおっとりとしたような雰囲気をまとった、メイド服を着た女性が現れる。

「うん、頼みたいことがあるんだよ」

「頼みたいこと？ ですか、何でしょうか？」

そう聞いてくるファクターに俺はひとつの情報末端装置を投げる。

「これは？」

「その中に情報がいってる女の子を引き取るんだけど、母親役をしてほしんだよ」

「八神 はやて、夜天の書に高い適正ありですか」

そう、八神 はやて、原作では闇の書事件の中心人物だ、この世界では3歳の頃に自動車事故で両親を失い、自身も下半身不随という障害を負っている。

「その子を夜天の書のセカンドマスターとして登録する、連れて行

くのはアルスマグナだけでヴォルケンリッターは連れて行かない」

「はい、私は問題ありません」

ふむふむ、すべては楽しい楽しいゲーム暇つぶしのために、だな。

私は院長先生に呼ばれて、ある部屋におる、どうやら、私を引き取りたい、いう人がおるみたいや。

「失礼します」

「ん、お邪魔する」

入ってきたのは2人、一人はとてもやさしそうな金の髪を腰まで伸ばした女性、もう一人は高校生ぐらいの男の人だった。

「は、はじめまして、八神 はやて、いいいます」

あかん、緊張するわ。

「ええ、はじめまして、私はファクターといいいます、よろしくね、はやてちゃん」

「は、はい、よろしくお願ひします、ファクター、さん？」

「緊張してるのね、まあ、これから話を始めるけどそんな緊張しなくてもいいわよ？ 少し驚くことがあるかもしれないけど」

うっ、緊張しとることはバレバレか、それにしても驚くことって

なんやろ？

「驚くことってのが気になってるようだな、まあ、さっさと本題に入るか」

今まで黙ってた男の人が一冊の本を私に渡した。

「なんですか、これ？」

『マスター認証、セカンドマスターとして登録します』

「おお！　しゃ、喋ったー」

そう言っつて、私は渡された本を投げてしまっ、が、本は投げ出された空中で止まっていた。

「その本は簡単にいえば夜天の書という魔法の本だ、アルスマグナ、出てこい」

『はい、主』

その声と共に長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性が現れる。

「へ、は？　な、なんや、どっから!？」

あまりの出来事に私の頭はパンク寸前になってしまっ。

「アルスマグナ」

「はい、分かっています」

「失礼します、セカンドマスター」

そう言って、アルスマグナと呼ばれた女性が私に触れる。

『ユニゾンイン』

その声と共にさっきの銀髪の女性がまた消える。

「さてと、どうだろう？ 足の感覚とか出たはずだけど？」

「え？」

さつきから、全部が急すぎてなにが起こってるかようわからん。

「私の足は……、ん？ なんや……動く？ どうしてや!？」

「まあ、これが魔法だな、はやて、良かったら俺たちの家族にならないか？ その足も治すことが出来る、どうする？」

「ダメですよ、ご主人様、きちんと説明しないとはやてちゃんが困惑してます、はやてちゃん、これからいろいろ説明するからよく聞いてね」

混乱しとった私にそう言って、ファクターさんが説明を始めた。

まず、男の人の名前は神野 創さんという名前で、魔法使い、いや、神様に近いらしい、神様ってそんなすごい人なんか……

それで、そんな人が私のところに来たのは夜天の書と呼ばれる魔法の本、デバイスというらしい、の適正があるからとのこと。

そして、どうせなら、家族を増やそうといい、私を引き取りに来

たらしい、この他にいろいろと説明してもらったけど、今重要な
はこれだけや。

「えっと、いいんですか？ 私が家族になっても」

「ええ、構いません、そのために色々と手続きもしていますし」

「家族になるんなら、ファクターが母親で俺が兄になる今は居ない
けど他にもヴォルケンリッターという守護騎士が4人居る」

い、いきなり大家族やな、でも、すっごく嬉しいわ！ どないし
よ、涙が出そうや。

「家族になりたいです、私をあなた達の家族にしてください」

「おう、それじゃあ、よろしくな、はやて」

「よろしくね、はやてちゃん」

そうして、私に家族が出来た。

ちょっとだけ夜の一族の力

創さんのゲームが始まって今日で1週間、私が手に入れたジュエルシードは1個、なのはちゃんが2個とキーアイテムで1点で合計3点、アリサちゃんは昨日3個目のジュエルシードを封印して3点。

私が一番遅れてる、どうしようこのままじゃ、負けちゃうよ〜

(マスター、ジュエルシードの反応がありました、他の二人は気づいてないようですが、マーキングしました)

巴六からそう念話きた。

「げっ！ 気づかなかった、なんで贄殿気づいてないのよ！」

「うっ、残念なの、すずかちゃん行ってらっしゃい」

2人は気づかなかったことを残念がっているようだ、まあ、色々と術式を弄って消費を少なくした感知魔法を常に使っていたのは正解だったんだね。

「うん、それじゃあ、行ってくるね、回収したら家にそのまま帰ろうと思うんだけど……」

今日は午後からお姉ちゃんとお出かけなんだよね。

「あ！ あたしもそろそろ帰るわ」

「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね」

「うん、お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買い物！」

アリサちゃんはパパとお出かけなんだ。

「そうなんだ、月曜日にお話聞かせてね？」

「それじゃあ、もう行くね」

「うん、いってらっしゃい」

「あの2人でいいのかな、巴六？」

『はい、男のほう所持しているようです』

それじゃあ、さっさと終わらせちゃおう。

「巴六、封時結界」

『封時結界』

通常空間から特定の空間を切りとり、時間信号をズラす。

「ん？ なんだこれ？ 人が居ない？」

「ホントだどうなってるとるんだろっ？」

2人は困惑しているようだ。

「すみません」

私は、そう言って話しかける。

「あ、君も」

「え？ どうした」

こちらをみた2人に目をあわせて心理操作を行う。

「ジュエルシード、小さな青い石を持っていますよね、渡してください」

「はい」

抑揚のない声で男の子がポケットからジュエルシードを取り出す。

「巴六」

『はい、ジュエルシード、ナンバー？、封印します』

ふう、これでジュエルシードは2個目、もっとがんばらう。

温泉旅行です 前編

うーむ、どうしよう？ なんだかわからんが高町家の家族旅行に誘われた。」

「行かないのですか？ ご主人様？」

「俺が行ってどうするんだよ？」

第一あの家族と話すのは気まずい。

「そうですか、私はなのはに誘われているので行くつもりです
がよろしいですか？」

「うーん」

確か、次のジュエルシードは温泉旅行の時に手に入るんだっけ、
すずかの家での邂逅がないからフェイトとはここで初遭遇させとく
か。

「うん、行ってこい」

「はい」

「創お兄ちゃん！」

「創さん」

「創」

三人娘に名前を呼ばれる。

「創お兄ちゃんも来るの？」

「いや、俺は行かない、白亜の見送りだ」

「やあ、はじめまして、君が創君かよくなのはから話を聞いていたよ」

そう話しかけてくるのは、高町 士郎、なのはの父親だ。

「おい、なんで、お前がここに居るんだ？」

「うーん、なんでって、妹を連れてきただけだよ、えっと、高町君でよかったっけ？ ってなのはちゃんの兄ならそうか」

とりあえず、猫をかぶって話しかける、大学も一緒だが殆ど話さないからな。

「お前、妹なんていたのか？」

「ああ、白亜」

「はい、お兄様、はじめまして、白亜と申します、今日はよろしく願います」

そう言って、俺の前に出て完璧なお辞儀する白亜。

「ははは、そんなに硬くなることはないよ、なのはの友達だったね、よろしく白亜ちゃん」

「はい、「こちらこそよろしくお願いします」

「あらあら、とても可愛い子ね、まるでお人形さんみたい」

ふむ、まあ、問題なさそうだな。

「それでは、白亜をお願いします、それでは」

「あ、はい、任せてください」

その声を聞いて俺は家に帰る、ふあゝあ、白亜も居ないし家でゆっくり寝よう。

「ねえねえ、白亜ちゃん、白亜ちゃんのお兄ちゃんってなんか武術でもやってるの?」

そつたずねてくるのは高町 美由希様、なのはの姉です。

「はい、やっていますよ、美由希様」

「へゝ、やっぱりそうなんだ、どんな事やってるの?」

「我流なので特に決まった名前があるわけではありませんが、お兄様はスキルゼロと呼んでいました、まあ、お兄さま自体は武術と呼ぶのもおこがましい一代限りの限定的技能と言っていました」

道場破りをしていた頃が懐かしいですね。

「スキルゼロ？ それってどんな武術なの？」

「はい、何でも相手の使用した技の瞬間習得と今まで習得してきた技を組み合わせて戦うという複合型の武術です

昔は道場破りなどをして技術を集めていました」

まあ、理不尽なものですね、何年も何十年もかけて習得したものが見られただけで習得されるのですから。

「え？ そんなのありなの？ てか、瞬間習得ってどれぐらいで覚えるの？」

すごく驚いたような表情でそう聞いてくる美由希様。

「見ればすぐに覚えます、お兄様も理不尽なものだと言っていました、本来なら何年も何十年もかけて習得する、秘技ですら一瞬で習得するのですから」

「それは、白亜ちゃんも使えたりするの、しないよね!？」

「使えませんが、先程も言いましたがこれは、一代限りの限定的技能ですから、私に出来ることはお兄様が習得した一部を教えてくださいとことくらいです」

真似できないことはないのでしょうか、全部が全部使える技と
いうわけでもありませんし。

「あ、白亜ちゃんもやっぱやってたんだ、でも、かなり自然体だ

よね、もしかして、白亜ちゃんもすごく強い？」

「さあ、どうでしょう？ 私はお兄様としか戦ったことが無いのでよくわかりません」

「あゝ、白亜ちゃんのお兄ちゃんも自然体で隙がなかったからとても強いと思うんだよね」

私はその言葉を聞いて、やはり、高町家はご主人様が言っていた通り、戦闘種族なのだと思った。

その後も、目的地につくまで様々な話をした。

番外編？ 卓球と呼ばれる超人スポーツ

「白亜ちゃんって温泉は好き？」

なのはがそう聞いてきます。

「はい、好きですよ昔はよく入っていました」

そうです、昔はご主人様の拠点に温泉がありました。が、ご主人様の拠点はみんなで少し出かけている間にどこかに消えてしまったのですよね。

ご主人様は消えてしまった拠点を探して見つけた時に大爆笑していました。

「昔は、って今は違うの？」

「はい、美由希様、昔住んでいたところは近くに温泉があったのですが今住んでいるところにはないので」

そういえば拠点はどうなったのでしょうか？ 気になります、あの時はご主人様は気にしていなかったようなので私も気にしていませんでした。が帰ったらご主人様に聞いてみましょう。

「あ、そうなんだ」

「はい、それにしても広い温泉ですね」

「たしかに」

体を洗いお湯につかります、なのはは美由希様の背中を流します。

温泉から上がり4人で卓球場へと向かいます。

それにしても面白いものがありますね、卓球場へと向かう途中どの使い魔が知りませんがすれ違いました。

まあ、一応ご主人様に報告しておきますが今は気にしないでおきましょう、これはなのは達の問題でもあるわけですから。

「さて、それでは始めましょうまずはすずかとなのは、シードにアリスです、優勝者にはポイント1点です」

「よろしくなの、すずかちゃん」

「うん、よろしくなのはちゃん」

どちらからも気迫がにじみ出ています。

「それでは、サーブ、なのはからどうぞ」

「それじゃあ、いくの！ はっ！」

なのはは、力加減をあやまったのかボールを爆散させます。

御神流を学んでいるとはいえありえない力ですね、まあすずかも本気になればこのくらい出来るでしょうが。

「ふえ？ ちょっと失敗しちゃったの」

「では、すずかに1点、サーブは2点交代なので次は気をつけなさ

いなのは」

そう言っ、私はなのはに新しいボールを渡します。

「にははは、気をつけるの」

なのははそう言っ、今度は魔力でボールを覆い、打ち出しました。

ボールは卓球台を陥没させシユルシユルと回転しています……ふむ。

「なのはに1点、サーブ交代です」

「え？ ええ！？ 今のアリなの？ いくら何でもひどすぎるよ白亜ちゃん！」

すずかから抗議の声が聞こえます。

「いいですか、すずかこれは卓球という皮をかぶった何かなのです、視覚をリンクさせているご主人様がOKといたったのです、頑張りなさい」

報告ついでにリンクさせたのですがご主人様も楽しまれているよ
うで、私も満足です。

「分かったよ、白亜ちゃん、わたし頑張る！！ いくよ、なのはちゃん！」

すずかもボールに魔力を纏わせてボールを打ち出す。

「ふふふ、甘いねずかちゃん」

ボールは卓球台に陥没するかと思われたが陥没せずに跳ねる、どうやら卓球台に魔力を纏わせているようです。

「はっ！」

なのはは、ボールを打ち返す。
そこからは、ラリーの応酬だ。

「ねえ、白亜、これって卓球なの？」

疲れたようにそう聞いてくるアリサ。

「そうですね、卓球と呼ばれる超人スポーツですね」

おおよそ、普通ではでないであろうドンッ！とかバンッ！など衝撃波を発生させながらするのですからその説明で問題ないですよ。

「白亜、あたしは棄権させてもらおうわ」

「賢い判断だと思います」

それにしても、決着がつきませんね。

「なのはちゃん、そろそろ決着をつけようと思っの、それでね、さよならなのはちゃん」

さすがが、その言葉と共にボールを打ち返し、ラケットを手放す、

ラケットはなのはに向かって一直線に飛んでいく。

「ふええ!!! きゃっ!!!」

ドツゴンツッ! とありえない音がしてラケットはなのはの頭にあたり爆散しました。

なのはは………気絶しているようですね、ギリギリでプロテクションを発動したようです。

「勝者、すずか」

「やったー!!!」

すずかは勝利にうち震えています。

「もうなにも言わないわ」

そうして、卓球と呼ばれる超人スポーツは終了したのでした。

温泉旅行です 後編

「ふう、そろそろいい時間ですね、寝ましようか」

「そうだね、そろそろ寝よう」

「うん」

「そうね、あたしももう眠いわ」

「ご主人様も夜更かしはダメだと言っていましたし、それではお休みなさい。」

目が覚めました、この反応はジュエルシードですか、他の3人も起きています。

「どうする、誰が行くの?」

「みんなで行きましょう、少々気になることがありますし」

「白亜の気になること? それってなによ」

「まあ、今はいいでしょう、早く行きますよ」

私はそうせかし、ジュエルシードが発動した場所に向かう。

「うっはー、すごいねこりゃあ、これがロストロギアのパワーって

やつ?」

私の使い魔であるアルフがそういう。

「ずいぶん不完全で不安定な状態だけどね」

「あなたのお母さんはなんであんなもの欲しがるんだろうね?」

理由はわからないけど、でも

「母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと……バルディツ
シュ、起きて」

『了解、シーリングフォームで起動します』

「封印するよ、アルフ、サポートして」

そして、眩いばかりの光の柱が立つ。

「1つ目」

「あれは!」

「ジュエルシードの封印? でも誰が? 私達以外にも誰かいたの
かな?」

でも、私たちは他の魔法使いに会ったことないの、創お兄ちゃん
からもなにも聞いてないし……。

「あーらあら、驚いたわ、他にも魔導師がいたとわね」

私達も驚いている、そこにいたのはデバイスを持った黒い少女と派手なお姉さんだった。

「あの、あなた達は何者ですか？ ジュエルシードをなんで集めてるんですか？」

「さあねえ、答える理由が見当たらないよ？ ふふふ」

なっ！ お姉さんが狼になったの！？

『マスター、どうやら使い魔のようです』

「へー、アレが使い魔ってやつなんだ」

知識としては知ってたけど、初めて見たの。

「そうさあ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命、製作者の魔力で生きる代わり、命と力のすべてを掛けて守ってあげるんだ、先に帰っててすぐに追いつくから」

「うん、無茶しないでね」

「オーケー」

「羨のなっていない犬ね？ いくわよ贄殿！ せいっ！！
すずか、なのは、その黒い子にあんた達に任せた」

アリサちゃんは黒い子の使い魔を吹き飛ばす、吹き飛ばされた使

い魔のお姉さんは水切りの要領で水の上を跳ねていく。

「アルフ!!」

「行かせないの、どうしてジュエルシードを集めてるかお話してもらうの!」

「あなたには関係ない、あなたも同じ目的なら、私たちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ということになるだけ」

「だから、そういう事を簡単に決めつけないために話し合って、必要なんだと思う」

創お兄ちゃんも話し合いは大切っていったの。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない……伝わらない!」

「あつ」

早い! 後ろに回り込まれた。

『フライアーフィン』

「でも、だからって!」

「かけて! それぞれのジュエルシードを1つずつ」

『フォトンランサー』

「二人で行っちゃった、なんか2人だけで理解しあって置いてけぼりくらっちゃた」

「そうですね、それにしてもあの黒い魔導師、なかなか強いですね、なのはも善戦していますが勝てないでしょう」

うん、確かにリミッターが付いてたらあの子はちょっと厳しいかな？

「負けましたね、やはりデバイスモードとシューティングモードだけでは厳しかったですか、これがツインソードモードを解禁されていれば別だったのでしょうか」

これは、なのはちゃんがマイナス1点かな、他の勢力がジュエルシードを集めるなんてこれからどうなるのかな？

ああ、拠点？ あれは

「ご主人様ただいま帰りました」

「ん？ ああ、お帰り、温泉はどうだった？」

フェイトとは初邂逅したようだし、これからどうしようかな？

「はい、とつてもよかったですよ、それで温泉で思い出したのが結局拠点はどうなったんですか？」

拠点？ ああ、そういえば教えてなかったな。

「拠点は時間をさかのぼって虚数空間に落ちた、いろんな物をばら撒きながら」

「時間をさかのぼって虚数空間に落ちたって、なにがあったんですか？」

「事故だ、俺が作った道具がいろいろ暴走した結果らしい、ちなみに今じゃあアルハザードって呼ばれているらしいぞー」

まあ、俺も知ったときは大爆笑だったが。

「アルハザード……そういう事でしたか、拠点は落としたままにしておくのですか？」

「必要になれば引き揚げるけど今はいらないだろ」

今のところは拠点が必要になる事態ってのではないと思うけどな。

「そうですね、それからすでに報告していますが黒い魔導師についてなのですが」

「ミッド式の魔法を使う魔導師、名前はフェイト・テストロッサ、ゲームの参加者として認める、景品は願いをひとつかなえてやる、だ」

「それは！……はい、わかりました」

白亜が何か言おうとしたが睨んだら了解した。

「そんな不満そうな顔するな、来い白亜」

「はう、ご主人様」

抱きしめて撫でてやる、そういえば最近構ってやってなかったな。と、そんなことを考えているとノックの音がした、誰だ？

「失礼するぞー」

「失礼します、マイスター」

どうやらヴィータとレイジングハート 長いのでレイと呼んでいる のようだ。

「ん？ どうしたヴィータにレイか、なにかようか？」

「ああ、報告だ報告、はやてのリンカーコアのコピーが終わった、

そんで今は創に言われたとおり健気にユニゾンデバイスを作ってるぞ」

これで、リインフォース・ツヴァイができるな、まあツヴァイじゃないけど。

「それにしても、いつもお前たちは二人一緒だな」

「はい、マイスター、お姉様は私の一番大切な人ですから」

ふむふむ、仲良きことは美しきかな、だな。

「はあ、レイ、お前はよく恥ずかしげもなくそんなことが言えるな、それに普通はあたしじゃなくて創のほうが大切だろ？」

「気にすることじゃないな俺は守ってもらわなくても大丈夫だし二人は存分に仲良くするといい」

「はい、マイスター、ありがとうございます」

精神的な成長も大切なものだ成長することによってさらに人間に近くなる、これもひとつの実験だった、魂は作れないが魂を宿すことのできる器を作ることではできないかという実験だ。

実験は見事に成功、最初のころはかなり微弱ではあったが最近ではかなり安定してきている。

まあ、これによって魂のことについてちょっとだけ理解できたことがある、とうだけが。

「それで、皆どうしてる？」

「ああ、シグナムはよくはやての世話をしてる、ザフィーラは好き勝手に動いてる、シャマルははやての世話とご近所付き合いしてるな」

「だいたい思ったとおりだな、まあ特に気にするところはないか。」

「それじゃあ報告ご苦労、もう帰っていいぞ」

「おう、それじゃあ、あたしは帰るレイ行くぞ」

「はい、お姉様！ マイスターそれでは」

そういって二人は帰っていった。

「八神 はやてですか、私にも何も教えてくださらないのですね」

「知る必要がないからな、まあこれも遊びの一環だ」

知ってたら楽しくないだろ、次のゲームもすでに考えてある。

「はい、分かっています、私に教えてくださらないということは次は私もゲームに参加させるのでしょうか？」

「ん、よく分かってるじゃないか白亜、まあせいぜい俺を楽しませろ」

「はい、ご主人様」

そういって白亜は俺に抱きつく、はあ、久々に構ってやるか。

60,000PV記念 今回は「うっ」

「やっと……ここまで来たね、ティア」

「そうねスバル、でもここからが本番よ」

そう、たくさんの犠牲を出してやっとここまで来たあの人を、創さんを助けるためにここまで……。

「二人とも、ここまで来ちゃったんだね？」

「なのは、さん……」

スバルの憧れの人、でも創さんをさらった人。

「魔王なのは」

「あははは、ひどいなあ、魔王だなんて」

魔王なのはは少しいやそうな顔をしてそういう。

「いくわよ、クロスミラージュ、クロスファイヤーシュート！」

『了解、クロスファイアシュート』

空中に複数の魔力スフィアが形成され、すべてが魔王なのはに向かって飛んでいく。

「はあ、アディクションハート、アクセルシューター」

『アクセルシューター』

あたしが撃ったクロスファイアシュートはすべて相殺される。

「マツハキヤリバー」

『はい、相棒行きましょう』

「ん？ まっすぐ突っ込んでくるなんて っ！！」

「はっ！、ディバインツ！！ バスター！！！！」

魔王なのは目の前にいたスバルが消え後ろに現れる。

「くっ！ 幻影かやるね、でもまだまだだよ」

やっぱり化け物のように強い、普通スバルのアレを片手で受け止めるなんてありえないから。

「ファントムツ！ ブレイザー！」

『ファントムブレイザー』

「ディバインバスター」

『ディバインバスター』

なっ！ あたしの攻撃、最大の威力を持つファントムブレイザーが！

「これで終わり、クロスファイア、シュート」

「え？ ひっ」

ドンッ！ と衝撃がきて意識が一瞬飛ぶ。

「ティアー！」

「じつとして、よく見てなさい」

スバルはバインドで縛られているのが見える。

「へ？ な、なのはさん！！」

魔王なのはの前にまた魔力が溜まる、そしてその魔力が
ドンッ！ その衝撃とともに私の意識は失われる。

「ティ、ティアー！！！」

ティアが撃墜された！

「ティアナ・ランスター、撃墜」

「くっ」

私は振り返る、絶対に絶対に許さない！！

「うあああああああ！！！！ 許さない、絶対に許さないぞー」

「！！！」

「これは、機人としての能力！！！」

「はあああああああ！！ デイバイーンツ、バスターー！！」

あたしは距離を一気に詰め、ゼロレンジで一撃を与える。

「くっ！ きゃっ！」

なのはさんのバリアを突きぬけあたしの攻撃がきまる。

「あははは、強くなったねスバル？」

うそ！ ボロボロだけどまだ立ってる！？ あたしは構えをとる。

「ああ、うん、私の負けだよスバル、実は立ってるだけで限界、だから」

「どうして、どうしてこんなことしたんですか？」

創さんをさらって、世界を混乱におとしいれて。

「そっか、まだスバルたちは私が黒幕だと思ってたんだ……」

「それは、どういっ」

「それはどういっことだよ、スバル」

「僕もとっても勉強になりました！」

ティアナたちがなのはまでたどり着けるようにフェイトを足止めしていた二人が言う。

「次回が最終回だな！」

そう、今回やっていたのは黒幕じつこ。

60,000PV記念 今回は 1つこ(後書き)

黒幕ごっこ最終回をやったほうがいいだろうか、それとも黒幕ごっこ
この最初から書いたほうがいいのか……。
まあ、どちらにしろ一発ネタだから書けるか分からないけど……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378z/>

リリカルなのは 最低なトリッパーの日々

2011年12月29日07時48分発行